

インターネットを長時間利用していると、脳の発達がとまる。中学2年生に小学5年生の脳が入っているようなものである。インターネット利用の影響で、大人の2割は集中力が10秒しかもたない。金魚と同じである。これらは、脳科学の川島隆太先生の講演で聞いた内容である。

わが身を振り返ってみる。インターネットを使って調べものをする。その場では解決する。だが、すぐに忘れる。川島先生によると、言葉の意味調べなど、スマホで調べると覚えていないが、紙の辞書で調べると、半分以上は覚えているそうである。

インターネットの記事を読んでいると、眠くなってくる。川島先生によると、脳が寝てしまうのだそうだ。また、メールを打っても脳の働きは起こらないとのことである。よくて何も起こらない。あるいは、脳が寝てしまう。

いろいろと当てはまる。これはまずい。それでなくても物忘れが激しい。だが、仕事にかかわることになると忘れない。新聞記事を黙読すると、ありとあらゆる脳が活性化する。新聞の社説など毎日800字分を音読すると、1か月後には記憶力が1.36倍よくなる。より速く読むと効果上がる。舌を噛む一步手前の速さで読むのがいいそうである。

というわけで、毎朝、新聞の社説を黙読することにした。日によって違うが、約1500字分である。ついでに、1面のコラム欄も黙読している。こちらは、約480字分である。合わせて1日約2000字分を黙読している。

新聞の黙読を始めて1か月が経過した。ありとあらゆる脳が活性化しているかどうかは、よくわからない。だが、読んでいる間は、集中して脳が働いているような気はする。やはり、音読にしないとだめなのか。もう少し、黙読を続けてみることにする。毎朝、わずか数分しかかからない。忘れない限りは、簡単にできる。

問題は、社説とコラム欄の中身である。社説がどうもおもしろくない。何も間違っていない。すべて正論であろう。専門的な漢字表記の熟語が並ぶ。それはいいのだが、もっと具体策に踏み込むことはできないのだろうか。紙面の都合でそうならざるを得ないのかもしれないが、主張内容が一般人でも言えそうなものになってることが気になる。昔からこうだったのだろうか。とはいえ、ものごとを考えるきっかけにはなる。

コラム欄はというと、よくまとまっており、見事ではある。しかし、心が動かない。辰濃和男さんが書いていた頃の「天声人語」はよかった。うなるような文章だった。わざわざ文庫版になったものを購入したくらいである。「文は人なり」書く人によって変わる。

今さらながら社説やコラム欄を読んでいる。こんなことは、決して特別なことではない。いつの間にか、新聞から遠ざかっていた。紙の活字から離れてしまっていた。川島先生の講演の中に印象的なフレーズがあった。「新聞は活字が勝手に家にやってくる」名言である。

今年度がスタートした。この「校長室だより～燦燦～」も、いよいよ最後の年となる。これから出せるのは、250号ぐらいになるだろうか。辰濃和男さんや伊集院静さんのようにはいかないが、気分だけでもなりきって書き続けたい。